

看取ることもできなかった。翌年卓爾は帰らぬ人となり、千曲川河畔に病院を建てるという計画は果たせな
いままとなった。

一九四一（昭和16）年二月、任務を終え子どもたちのもとへ帰って来たみつのは、翌年、看護婦長としての功績により勲八等瑞宝章を授与された。四三歳で召集されてからの四年間で、真つ黒だったみつのは髪は真つ白になっていた。

●日本のお母さん

村に帰ったみつのは、すぐに国防婦人会長、助産婦としての活動を始めた。戦中戦後の日本は疎開者や引き揚げ者があふれ、食べるものも着るものもない時代。みつのは四八歳になってから自転車習い、お産で呼ばれると近隣の町や村へも昼夜の区別なくかけつけた。貧しい家からは助産料をもらわないどころか、栄養をつけるようにと米や野菜を家へ運んだり、着物や浴衣を持って行っておおつにしゃべりもした。



自転車で往診するみつの
(写真提供 主婦の友社)

時には赤ちゃんを包むため、自分の着ていた肌着まで脱いであげてしまい、「寒い寒い」と帰って来たのをみつの子どもたちは見て育った。

こうした献身的な行いから、一九五五（昭和30）年「日本の母」として主婦の友社より顕彰を受ける。



赤ちゃんをとりあげるみつの
(写真提供 主婦の友社)

一九六三（昭和38）年、胃潰瘍や血清肝炎にかかたみつのは、翌年助産婦の任を閉ざす。七〇歳だった三〇歳の時からとりあげた赤ちゃんは四〇年の間に三千人余に達したという。

その後みつのは、寒い冬は東京の娘の元で過ごし、夏は涼しい信州で過ごすこともこしや枝豆をつくって、子や孫が帰ってくるのを待っていた。

一九七六（昭和51）年六月八日、八二歳になる直前に死去。菩提寺の菩提院で行われた葬儀には、お世話になった村中の人々が列をなし、涙ながらに見送った。

●いのちの尊さひとさまの為に

みつのが亡くなってから23年後の二〇〇〇（平成12）年、地元有志らでつくられた「柳本みつさんの碑を建てる会」の呼

びかけに、町内外の八六五人が賛同し、白田駅前広場に碑が建立された。

四月三日の

除幕式には大勢の人が参加し、みつのは娘や孫、曾孫も駆けつけた。

以来毎年一月三日、碑前祭が行なわれている。すでにみつのを知らない世代になってきているが、なお語り継がれている「いのちの尊さひとさまの為に」の碑前には、今も花が絶えない。

（西來みわ）



白田駅前建てられた碑。みつのが最初にとりあげた故高橋信行の筆による。

参考文献

柳本みつさんの碑を建てる会

『柳本みつさんの碑 建立記念誌』

西來みわ『風車―永遠に母は駆ける音である―』

朝日新聞東京本社 朝日出版サービス

佐久の先人たち³⁰

3000人を超える赤ちゃんを とりあげた助産師

やなぎもと

柳本みつの

(1894~1976年)



戦中戦後の苦しい時代、女手一つで8人の子どもたちを育て上げるかたわら、みつのは助産婦として3000人を超える赤ちゃんをとりあげた。自分の苦労を外に出さず、地域の人たちのために尽した善行の数々は、永遠の母として今なお語り継がれている。

る。当時佐久鉄道（現小海線）は開通していなかった
ので、小諸駅まで五里（約20km）の道を歩き上京した。
一九一四（大正3）年に養成所を優秀な成績で卒業。
婦長候補としての教育を一年間受けた後、婦長として
働くかたわら、助産婦の資格もとった。

一九一九（大正8）年、数え二六歳になっていたみ
つのは、「淋しいから帰って来ておくれ」という父の
言葉に心を動かされ、日赤中央病院を退職し臼田町へ
帰った。看護婦講習所に講師として招かれたみつのは
看護実習を教えることになる。同じく講師を務める医
師の中に田口村（現佐久市田口）の柳本卓爾がいた。

●お医者さんの家

一九二〇（大正9）年の夏、伝染病が流行した。み
つのは病院へ呼ばれ泊り込みの看病にあたっていたが、
そこに卓爾が往診に来ていた。

あわただしい夏が終ると、郡医師会長の仲人で、二
人の縁談が進められた。卓爾は三人の子をのこして先
妻に先立たれていたため、みつのはいきなり一歳二カ
月の男の子と、三歳と七歳の女の子の母親となった。
卓爾が開業していた下越^{しもし}の医院で、みつのは看護婦だ
けでなく、助産婦としての活動を始める。その働きぶ
りは「奥さんはいつ眠るすら」と他の看護婦やお手伝
いさんが不思議がるほどであった。

龍岡藩の御殿医だった柳本家には古くからのしきた

りがあり、姑や小姑は厳しかったが、みつのは三人の
義理の子の母になろうと一生懸命に働き、しはおこ
しの出としての自負から、実家へ泣き言など一度も
言ったことはなかった。

●看護婦長として召集

一九三七（昭和12）年から始まった中国との戦争の
ため召集されていた卓爾が過労で倒れたため、みつのは
広島陸軍病院まで迎えに行った。帰郷の途中に安芸
の宮島に立ち寄ったが、これが夫婦二人の最初で最後
の旅行となってしまった。



日本赤十字社東京支部救護看護婦長時代のみつの

卓爾の帰郷と入れ替わるように、みつのは日本赤十
字社東京支部救護看護婦長として、東京第一陸軍病院
へ召集される。四女、五女はまだ小学生。村中の女性
が見送る中、汽車の窓から身を乗り出し、何回も何回
も頭を下げた。

小さな子どもたちを残して出征したみつのは、夫を

●しばおこし

柳本（旧姓嶋崎）みつのは、一八九四（明治27）年
南佐久郡臼田町（現佐久市臼田）のしはおこし
（方言で、その土地を開拓して最初に住み着いた家）
権蔵、らくの四女として生まれた。

臼田尋常小学校（現臼田小学校）に入学したみつのは、
権蔵が子弟の教育に熱心だったこともあり、一九
一一（明治44）年に補習学校を卒業した後、南佐久臼
田看護婦講習所の講習を受けたが、六カ月の講習に満
足出来ず、東京の日本赤十字社看護婦養成所に入学す